

- 日本の神様** 限りなく人間に近い営みと生身の人間を感じさせる。神祇信仰(天津神と国津神)
- 日本神話** 天地と神々の始まりを物語的に語り、イザナギ、イザナミが日本の国生みをする神秘的な場面を描いており、それ以降神武天皇が東征を行い即位するまでを一般的に神話と呼んでいる。この基礎となっているのが古事記と日本書紀(出雲部分が約4割)。ただし一神教のように天地創造はしていない
- 主な範囲** 天地開闢、国生み、神生み、アマテラス・スサノオの誓約、天岩屋戸、出雲神話、国譲り、天孫降臨 山幸彦・海幸彦、神武東征(高天原と葦原中つ国・黄泉の国)
- 史書** 古事記、日本書紀の読み方として、編成当時(8世紀初頭)政権にとって都合が悪い事は隠ぺいされている。それらの中で真実とは何か歴史的、考古学的に議論されている
- 日本の神 アミニズム** 古来より日本人は身の回りのあらゆるものに精霊が宿り神秘性を感じてきた。山、木、岩、沼の自然に対してシメ縄が張られ丁寧に祀られている。そこに神が「依り来る」と信じられた。神は大自然そのものであり災いをもたらし、人智を超えた力を発揮する。その一方で恵みをもたらす大自然そのものだから日本人の心の支えでもある反面、崇りをもたらす恐ろしい「鬼」となる
- 神の定義** 江戸時代の国学者、本居宣長「古事記伝」第三巻より
神とは神話に登場する神々や神社に祀られる神霊はもとより、人であったり、鳥や獣、木草の類、海山、そのほかの様々なものであるなど世間一般ではない何か卓越した力を持ち、恐れ畏む(カシコム)べきものを言うのである。世の中全ての出来事は神々の仕業であり、その神の行いのすべてを人間が理解することは不可能である。また神は儒教や仏教と違って教えを受けたりするものではない
- 神道の基本** 崇る恐ろしい神(鬼＝モノ)を祀り上げなだめすかして、おとなしくなってもらうことが最大の目的
- 崇りとは** 古代人にとって「崇り」は現実であった。大自然の猛威を恐れるところから始まる。この人智の及ばない恐ろしい力を古代人は「神」と敬い恐れた。その神は時として「鬼」に化け人々に災いをもたらした。古代人の精神変化とは勝者の一方的な正義ではなく、敗者側の恨みと勝者側の怯え、畏敬の念が混ざり合って「崇り」が具現化する。一神教と違って絶対的な正義があげられない
- 御霊信仰** ゴリョウ。人々を脅かすような天災や疫病の発生を怨みを持って死んだり非業の死を遂げた人間の「怨霊」とすることにより崇りを免れ平穏と繁栄を実現しようとする日本の信仰のこと。これら亡霊を復位させ官位を贈りその霊を鎮め神として祀れば「御霊」として霊は鎮護の神として平穏を与える
- 神の靈魂** 同じ神様でも二つの側面を持っている。神道信仰の源。
和魂(ニキタマ) 雨や太陽の恵みなど神の優しく平和的な側面、神の加護は和魂の表れ
荒御霊(アラミタマ) 荒ぶる魂、天変地異を引き起し病を流行せて人心を荒廃させ争いへと駆り立てる
祭祀をする事により荒魂から和魂に変化すると考えられた。皇大神宮-荒祭宮 出雲大社-大神神社
- 神仏習合** 日本に仏教が入ってくると神道との融合が始まる。本地垂迹説(ホンチスヅヤクセツ)日本の神は仏がその姿を現したものと言う考え方。反対は神本垂迹説
八幡大権現(応神天応)、牛頭天王(スサノ)、7世紀以降、習合が盛んに行われた
熊野信仰、比叡山(日吉大社)、出羽三山、稻荷信仰、、、
- 一神教** キリスト教、イスラム教。唯一絶対の神。人を神の子として地球の自然、生活を支配し改造する権利を神から与えられたと考える
- 多神教** ギリシャ神話(最高神ゼウス)、エジプト神話(太陽神ラー)、日本神話(アマテラス)八百万神

一神教・仏教・神道の比較

	一神教	仏教	神道
信仰対象	唯一の神	如来・菩薩など多数	八百万神
信仰目的	神の教えに従って生活する	解脱する、浄土に住む	神を畏れ敬う
戒律	ユダ、ヤイスラムは厳しい	日本以外厳しい	無い
聖典	聖書・コーラン	お経	無い
拡大解釈	キリストを宗派とする宗派としない宗派がある	柔軟、人間が主体	非常に柔軟
天国と地獄	Heaven,Hell	浄土・地獄	無い

